15. 各領域の活動

<がん看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

がん看護学領域では、看護相談事業の一環として、地域の看護師とがん看護学領域の学生とともに、がん患者と家族へのケアの質向上を目指して、継続的に「質の高いがん看護実践を検討する会」を開催している。新型コロナウイルス感染拡大以降は完全オンライン開催していたが、今年度は新しい試みとしてサテライト会場を設け、3会場（高知県立大学池キャンパス・高知県立あき総合病院・高知県立幡多けんみん病院）をオンラインで繋げて、『皆で考えよう“認知症をもつがん患者への看護”-患者・家族のニーズをいかにつかむか-』をテーマに開催した。

【第1回】

テーマ：認知症をもつがん患者の症状マネジメント

日時：令和5年11月3日（金・祝）13:00～15:00

場所：メイン会場：高知県立大学池キャンパス、サテライト会場：高知県立あき総合病院・高知県立幡多けんみん病院（地域の看護職は希望する会場で参加）

参加者：3会場：29名（看護職者23名、大学院生2名、教員4名）

【第2回】

テーマ：認知症をもつがん患者の希望を把握し、支える看護ケア

日時：令和6年2月10日（土）13:00～15:00

場所：メイン会場：高知県立大学池キャンパス、サテライト会場：高知県立あき総合病院・高知県立幡多けんみん病院（地域の看護職は希望する会場で参加）

参加者：28名（看護職者23名、大学院生2名、教員3名）

2) リカレント教育

がん看護学領域では、①がん看護の質向上のための自己研鑽・情報交換、②修了生のネットワークづくりの充実を図ることを目的として、がん看護学領域修了生の会『アストラルの会』を運営している。今年度はWeb会議システムを用いて修了生の自己研鑽を目的とし学習会を開催して、事例を通してがん看護専門看護師としての支援や組織のニーズに応じた活動の在り方を検討した。

【第1回】

テーマ：医師の治療方針により患者・家族の意向に沿えない看護師の葛藤に関わった事例

事例提供者：がん看護専門看護師 上田 三智代 氏

日時：令和5年9月2日（土）10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：14名（修了生12名、教員2名）

【第2回】

テーマ：治療意欲の低い重複がん患者と治療に積極的な家族への関わりについて

事例提供者：がん看護専門看護師 溝渕 美智子 氏

日時：令和5年12月2日（土）10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：14名（修了生9名、大学院生2名、教員3名）

3) がん看護学領域特別講義

がん看護学領域特別講義では、がん看護学領域の修了生が後輩である大学院生や修了生を対象に、

修了後のがん看護専門看護師としての役割開発のプロセスや日頃の実践活動について語る機会を提供している。

テーマ：がん看護専門看護師の実践と役割開発

講師：長崎医療センター がん看護専門看護師 田中 圭 氏（16期生）

日時：令和5年9月30日（土）13:00～15:00

開催方法：オンライン

参加者：9名（本学大学院生5名、修了生1名、教員3名）

内容：がん看護専門看護師認定後から現在に至るまでの活動として、役割獲得に向けた戦略や実践、院内のがん看護の質向上に向けた取り組み、また、地域でのがん普及活動について講義をいただいた。本学の大学院生は、活躍している先輩の講義を受けて、がん看護の質向上のためには所属する組織を知り、さらに地域を知ることの重要性を学んだ。また、がん看護専門看護師として役割開発をする以前に、自分の強みを知ることや自身の課題にも向き合う機会を得た。

4) がん教育外部講師派遣事業

がん対策推進基本計画に、がん教育・がんに関する知識の普及啓発が課題にあげられており、各都道府県でがん教育への取り組みが行われている。高知県では、がん教育の内容を充実させ、がんに関する正しい知識を理解し、がんを学ぶことを通して健康といのちの大切さに気づくことを目指し、外部講師派遣事業が行われている。今年度は、4名の教員が派遣依頼を受けて小学生、高校生および教職員、保護者を対象にがん教育を実施した。

(1) いの町立長沢小学校

日時：令和5年6月12日（月）

対象：1・2・4・5年生、教職員、保護者

講師：高知県立大学看護学部 豊田 邦江

内容：がんについての基礎知識、がん検診の大切さ、がんと生きる、がんに罹患して感じたこと・考えたことに関する授業

(2) 高知県立山田特別支援学校

日時：令和5年9月6日（水）

対象：高等部1年、教職員

講師：高知県立大学看護学部 有田 直子

内容：がんについての基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがんと、がんと生きるに関する授業

(3) 高知県立日高特別支援学校高知しんほんまち分校

日時：令和5年9月12日（火）

対象：高等部2年、教職員

講師：高知県立大学看護学部 有田 直子

内容：がんについての基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがんとに関する授業

(4) 香南市立夜須小学校

日時：令和5年11月30日（木）

対象：6年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 廣瀬 未央

内容：がんについての基礎知識、がんと生きる、がんと心のケア、がんに罹患して感じたこと・考えたことに関する授業

(5) 高知市立布師田小学校

日時：令和6年2月6日（火）

対象：6年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 田之頭 恵里

内容：がんについての基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがんに関する授業

2. 研究活動

がん看護学領域では科学研究費助成金を受けて、藤田が研究代表者の「外来治療する高齢がん患者を支える協働型包括的機能評価に基づく統合ケアモデルの開発（基盤研究 B）」に各教員が共同研究者として研究活動に取り組んでいる。また、「高齢がん患者への緩和ケアと認知症ケアに統合モデルの開発（基盤研究 B）」の公表に向けて取り組んだ（各教員の取り組みについては、教員の活動、研究に関する報告を参照）。

3. 活動の評価

社会貢献活動におけるケア検討会では、本年度の新しい試みとして、地域の看護職の方が希望する会場で研修を受けられるように、高知県立あき総合病院・高知県立幡多けんみん病院の皆様にご協力を頂き、サテライト会場を設け、各施設をオンラインで繋げて開催した。新型コロナウイルス感染拡大以降の、久々の対面開催で活発な意見交換が行われた。参加者の方からは、知識の習得だけでなく、「他施設の看護職同志で話し合うことで、自分たちの実践を考える良い機会となった」という意見や、サテライト会場を設けたことで「近くの会場で参加が出来る」という意見も聞かれた。サテライト会場を設け、対面開催にしたことで、組織を超えた看護職相互の関係を育むことにつながったと考えられる。

リカレント教育では、県内外の修了生が参加し、先輩 CNS との活発な意見交換が行われ、研鑽の場になった。

4. 次年度の課題

ケア検討会では、各施設に協力を頂き、サテライト会場を設けて対面開催としたことで、参加者のニーズや仲間づくりに貢献できる企画・運営することができた。リカレント教育では、継続してオンライン開催とすることで、修了生同士のネットワークづくりを強化していく。

研究活動については、修了生の論文投稿の支援および教員が取り組んでいる研究を進め、結果を公表できるよう引き続き取り組んでいく必要がある。

<慢性期看護学領域>

1. 社会貢献活動

高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業の実施

高知県は、全国に比べて男性の壮年期死亡率が高く、糖尿病をはじめとする血管病対策が喫緊の課題となっている。このため、糖尿病に焦点をあて、糖尿病が重症化しやすいハイリスク者の減少及び、治療中断者の減少を目的に令和元年度より高知県より委託を受け、糖尿病保健指導連携体制構築事業を実施した。詳細の事業報告は、「健康長寿センターにおける活動」にて報告している。

1) モデル基幹病院における糖尿病重症化予防の支援体制強化(10 施設)

モデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化として、血管病調整看護師及び候補者を対象に、対面および web 会議システムにて、1 年間の研修計画と活動の協働目標、及びケア調整活動内容を検討・共有する研修説明会を 1 回、スキルアップ研修会を 2 回、合同事例検討会を 1 回、計 4 回の合同研修会を開催した。スキルアップ研修会は、第 1 回「レベル別の効果的・効率的なケア調整：～問題-成果-介入リンケージの応用～」、第 2 回「自施設の効果的・効率的なケア調整を目指して」をテーマに開催した。10 施設合同の研修会 4 回の参加者は、延べ 160 人であった。

2) 公開講座の開催

本事業及び高知県の糖尿病重症化予防の取り組みを県内多職種や市民に周知する目的で、公開講座を対面および web 会議システムにて 1 回開催した。テーマ「地域住民とともに 糖尿病の重症化を防ぐ！～先進地域の安芸に学ぼう～」のもと、安芸地域の糖尿病重症化予防を推進する講師を招聘し、講演会を開催した。参加者は延べ 78 人であった。

日 時：令和 6 年 2 月 10 日(土)13：30～15：00

方 法：対面と遠隔のハイブリッド開催

参加者：66 名（対面 18 名、オンライン 48 名）、教員：5 名、事務局：3 名 計 74 名

プログラム：

- (1) 高知県の血管病調整看護師って何？
- (2) 高知県の糖尿病重症化予防のための保健医療連携体制について
- (3) 糖尿病重症化予防を促進する安芸保健医療圏域ネットワークづくり
- (4) 地域ぐるみの血管病重症化予防活動
- (5) 高知県糖尿病療養指導士を中心とした東部地域での多職種で取り組む重症化予防
- (6) 病院と地域のネットワークにおける血管病調整看護師の役割

3) 院内事例検討会・コンサルテーション

モデル基幹病院 10 施設に対し、コロナ感染状況に応じて対面もしくは web 会議システムにより、院内事例検討会・コンサルテーションを実施した。参加者は延べ 106 人であった。

4) 事業報告会の開催

事業報告会は、対面および遠隔のハイブリッド開催予定である。

2. ケア検討会およびリカレント教育の開催

高知県内の看護職とともに慢性疾患をもつ人の体験や背景を理解し、看護について検討することを目的に 7 月にケア検討会・リカレント教育を同日開催した。

ケア検討会・リカレント教育

日 時：令和 5 年 7 月 14 日(金)18：00～19：30

方 法：高知県立大学池キャンパス遠隔開催

参加者：血管病調整看護師・大学院修了生：7 名、教員：4 名 計 11 名

テーマ：脳出血後の ADL 低下から糖尿病悪化をきたした壮年期女性

事例提供者：第 3 期モデル病院 横畠絵理（川村会くぼかわ病院 特定行為認定看護師・血管病調整看護師）

3. 次年度の課題

令和 6 年度は、高知県血管病調整看護師のフォローアップ研修を開催予定である。

高知県血管病調整看護師の院内多職種との協働・連携強化を目指して後方支援を継続する。また、高知県 2 次医療圏の糖尿病重症化予防の連携体制強化に向けて、県福祉保健所、市町村保険者、及び血管病調整看護師らが協働的に課題を明確化し効果的な取り組みができるよう、関係者間の調整支援を行う。

さらに、血管病重症化予防の現状と課題、及び効果的なケア活動への理解を深められるよう、リカレント教育やケア検討会では、大学院生の高度看護実践だけでなく血管病調整看護師のケア調整活動をテーマにした学習機会を提供していく必要がある。

<急性期看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会（看護相談室）

急性期看護学領域では、臨床現場で実践している看護師とともに、重症患者や家族へのケアの質を高めることを目的として、「クリティカルケア看護学ケア検討会」と称して2回/年、事例検討会を開催している。今年度は「救急・集中治療領域における緩和ケア」をテーマとし、対面+オンラインによるハイブリッド方式で開催した。第1回は2023年6月13日に開催し、12名の参加があった。気管支喘息の重責発作を繰り返す成人期男性の事例について検討し、患者の身体的苦痛の緩和だけではなく、ともに暮らす家族への社会的、心理的苦痛の緩和が重要であることを振り返った。第2回は2024年2月13日に開催し、11名の参加があった。間質性肺炎の急性増悪の高齢独居男性患者の事例について検討し、Comfortケアの視点をふまえた患者へのケアの内容や重要性について振り返った。加えて、近年注目されている「クリティカルケアにおける緩和ケア」に関するミニレクチャーを行い、日々実践している看護の振り返りの機会をもった。

2) リカレント教育

(1) CCNS 申請への支援および修了後の継続学習

今年度はオンラインにて事例検討会を4回開催し、のべ20名の参加者があった。現在CCNSで活躍されている修了生からの事例について検討し、併せてCCNSの持つ役割について考察することができた。

第1回：2023年5月20日

第2回：2023年6月17日

第3回：2023年7月15日

第4回：2023年8月19日

2. 研究活動

急性期看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費や外部研究機関の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

2020年度から「ICUにおける人工呼吸器装着患者の集中治療後症候群予防のケアガイドライン開発」（研究代表者：神家ひとみ）、2021年度から「クリティカルケア看護師の緩和ケアコンピテンシー育成プログラムの開発」（研究代表者：大川宣容）、2023年度から「高齢消化器がん患者の機能変化と生活の融合を目指した周術期回復支援プログラムの開発」（研究代表者：森本紗磨美）、「高齢者股関節手術前の運動・認知介入による術後せん妄予防の検討」（研究代表者：村川由加理）の研究に取り組んでいる。他領域教員との共同研究として、2023年度から「Transitionを基盤としたICU看護師の成長を導く支援プログラムの開発」（研究分担者：大川宣容、神家ひとみ、森本紗磨美）に取り組んでいる。

さらに、他機関の共同研究として、「家族との協働型エンドオブライフケア実践能力を高める看護遠隔教育プログラムの開発」（研究分担者：大川宣容）、「eラーニングによる介護者のためのエンハンスメント・プログラム活用の在宅療養支援」（研究分担者：大川宣容）、「高齢在宅療養者の急変対応スキル獲得に向けた訪問看護師遠隔教育プログラムの開発」（研究分担者：大川宣容）に取り組んでいる。

また修了生に対する研究活動支援により1名が第19回日本クリティカルケア看護学会にて発表した。

3. 大学院関連

新たに1名の急性・重症患者看護専門看護師が誕生した。

また、年1回、順天堂大学大学院、福岡大学大学院の教員、院生との交流会を行い、現状や課題などを共有、意見交換を行うなど、交流を図っている。

4. 評価および次年度の課題

今年度よりリカレント教育やケア検討会はオンライン+対面のハイブリッド方式で開催した。コロナ禍以降、領域内で蓄積してきたノウハウをもとにして開催することにより、高知県内のみならず、遠方からの参加が容易になった。また広報活動の工夫により事例検討会の案内を広く行うことで多くの参加者を募ることができた。次年度も引き続き、今年度実施した広報、運営方法を基に、より効果的な広報、運営方法を検討していく。

各教員が外部資金を獲得し、研究課題に取り組んでいるが、研究成果の公表が十分にできていないことから、研究成果の公表を積極的に行っていくことが領域としての課題である。

<小児看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 小児看護学領域の大学院在學生・修了生の交流会

本年度の交流会は、対面とオンライン会議システムを活用したハイブリッド形式での開催とし、7月23日(日)に実施した。大学院在學生、修了生ならびに教員を含めた12名が参加し、現在取り組んでいることなどの近況報告や小児看護専門看護師として活動している中で6つの機能の展開内容の紹介、難しいと感じることや見出された課題への取り組み、組織のなかで求められる役割などについても具体的に意見交換を行うことができた。また、修了生と在學生との交流やネットワークづくりの場としても有効であったことから、次年度も交流会を開催していきたい。

2) 小児看護学領域事例検討会

修了生や大学院在學生を対象として、例年、年3回程度開催していたが、感染症のリスクが続いていることや、オンライン会議システムでは個人情報漏洩の危険があるため、実施を見送った。今後の開催方法について検討していく予定である。

3) 高知医療センター・高知県立大学包括連携事業

(1) 継続教育支援 (9/21・11/2・12/21)

毎年、高知医療センターすこやかAフロアと連携して実施計画を立案し、教育支援を行っている。本年度の教育支援では、新人看護師を対象とした「けいれんの子どもへの対応」をテーマに、シミュレーション勉強会を行った。それぞれ3~6名の看護師と副科長、科長が参加し、複数の場面を通してけいれん時の子どものケアについて参加者同士で意見交換を行うとともに、知識に基づくけいれんへの適切なケアについても話し合う機会となった。次年度も部署のニーズに応じた教育支援を立案し、実施していく予定である。

(2) 臨床実践能力及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究

開催日時：メール審議

参加人数：17名(医療センター2名、県大12名)

内 容：「命に向き合う子どもと親のエンドオブライフへの看護支援モデルの構築と活動」(研究代表者：中野綾美)における、家族を対象とした研究をNICU・GCU、小児病棟の看護師とともに共同研究を実施した成果の誌上発表に向けて取り組んでいる。

(3) 赤ちゃん同窓会

本年度もCOVID-19やインフルエンザ感染症の流行に伴い開催中止となった。

(4) 小児看護の魅力を語る会

本年度もCOVID-19やインフルエンザ感染症の流行に伴い実施しなかった。しかし、実習を通して、小児看護の魅力について教えていただいている現状を踏まえ、継続の可否を含めて検討していく。

2. 研究活動

1) 教員の研究活動

小児看護学領域では、各教員が研究代表者(基盤研究B、基盤研究C)として、また共同研究者として科学研究費助成金を受けて研究活動に取り組んでいる。「家族との協働型エンドオブライフケ

「実践能力を高める看護遠隔教育プログラムの開発」(研究代表者：中野綾美 2021年 - 2024年)、「医療的ケア児と家族を支える看護職の good practice 収集による学習プログラムの開発」(研究代表者：佐東美緒 2023年 - 2026年)、「成人期に移行する心疾患の子どもと親の軌跡を支援する医療地域連携プログラムの開発」(研究代表者：高谷恭子 2023年 - 2026年)、「血液・腫瘍疾患の青年の SDM を支援する専門看護師の家族協働型実践プログラムの開発」(研究代表者：有田直子 2023年 - 2026年)に取り組んでいる(詳細は教員の活動、研究に関する報告参照)。

また、他大学との共同研究、ならびに、科学研究費助成金以外の外部資金を得た共同研究にも取り組んでいる。

2) 修士論文・博士論文の公表

令和5年度公表された修士論文、博士論文については以下に記す。

【博士論文】

- ・嶋岡暢希、中野綾美、野嶋佐由美 (2023)、乳児期の子どもを育てる親の Mastery モデルの検討、高知女子大学看護学会誌、48 (2)、10-22

【修士論文】

- ・清重真衣子、高谷恭子、中野綾美(2023)、苦痛を伴う処置を受ける乳児期の子どもに対する熟練看護師によるケアリング、日本小児看護学会第33回学術集会
- ・高橋啓太、高谷恭子、中野綾美(2023)、小児期に化学療法を受けた経験をもつ青年のストレス、日本小児看護学会第33回学術集会

3. 教育活動

本年度は、5月に COVID-19 が 5 類感染症に移行し、講義科目は対面での授業となった。感染拡大時に作成した授業動画は、授業の復習や、欠席した学生への対応で活用した。また、Moodle は、授業事前課題や事後課題に継続して活用した。Moodle の活用は、学生たちの主体的な学びへの支援となり、記入されたリアクションペーパーを活用して、学生と教員の対話ができるようにした。看護実習では、感染管理に細心の注意を払いながら、COVID-19 前の実習日程で、全実習を終えることができた。臨地での実習では、実習施設の協力を得ながら子どもや家族への実践や、学内でのカンファレンス等を通して、実習目的を達成することができたとともに、ルーブリックを用いた学生との対話を通して実習の振り返りを行うことができた。

4. 活動の評価

COVID-19 が 5 類に移行しつつもインフルエンザ感染症が流行するなど、感染症拡大に伴い、高知医療センターと共催で開催している赤ちゃん同窓会や、専門職者や修了生を対象とした事例検討会を開催することができなかった。感染状況を鑑みながら、「けいれんの子どもへの対応」のシミュレーション勉強会を計画通り実施できたり、オンライン会議システムを活用しながら、小児看護学領域として縦や斜めのつながりを強化する取り組みの継続ができた。このことから、社会のニーズに応えられる活動範囲の拡大に向けて、オンライン会議システムの活用ならびに、安全なハイブリッド型の運営を検討し、実施していくことが課題である。

5. 次年度の課題

社会貢献活動については、オンライン会議システムの活用により遠方の修了生や専門職者がより参加しやすくなる利点があるため、様々な感染症の流行状況に応じて、オンラインを含めたハイブリッド型の運営を継続して実施していく。

研究活動に関しては、修了生の論文投稿の支援および教員の論文投稿に取り組んでいくとともに、各教員または共同研究として取り組んでいる研究活動の推進に力を注いでいくことが課題である。

<母性・助産看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

令和6年度は「分娩介助場面における学生への指導について」をテーマに、Web会議システムを用いた検討会を行った。参加者は12名で、助産看護実習で臨床指導に携わっている病棟助産師7名と、本学教員5名であった。各施設における助産看護実習の指導体制、および、指導方法の現状について情報共有を行った。また、臨床の新人助産師もまた、分娩が進行しない産婦への援助を経験することが少ないため、卒後継続教育が必要であること、実習においては、シミュレーションを効果的に活用すること、学内実習を工夫する必要性を確認した。ケア検討会を通じて、他施設の臨床指導の実際を共有したり、助産看護教育に関する意見交換ができ、今後の実習に向けて貴重な機会となった。

2) 令和5年度母性・助産看護学領域交流会

Web会議システムを使用して交流会を行った。県内外より卒業後1年目の5名と教員5名が参加し、近況を共有した。

3) SimCapture Virtual SUN

「助産看護領域におけるコース設計の実際～分娩介助技術試験～」をテーマに、SimCaptureを活用した助産看護領域におけるシミュレーション教育の実際について、オンラインセミナーで紹介した。

2. 学習会

母性・助産看護学に関する学習会を、Web会議システムにて4回開催した。県内外の助産師、母性・助産領域教員（他大学含む）が参加した（各回2～5名が参加）。下記をテーマに、先行研究や看護活動を通じた意見交換を行った。

[第1回] 令和5年4月12日「母性看護におけるAIの可能性」

[第2回] 令和5年5月10日 [ロボットと看護・育児]

[第3回] 令和5年6月7日 [母性・助産看護とジェンダー]

[第4回] 令和5年10月11日 [少子化時代における取組]

3. 研究活動

母性・助産看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。2018年度から「ICTを用いた妊婦の災害への備えを促進するための介入の効果検証」（研究代表者：渡邊聡子）、2019年度から「低出生体重児のFamily Confidenceを育成する看護介入プログラムの開発」（研究代表者：岩崎順子）、2021年度から「周産期医療施設における両親を対象とした妊産婦健診ケアモデルの開発と検証」（研究代表者：嶋岡暢希）、2022年度から「Family Confidenceを高める乳児家族ハイブリッド型看護介入モデル開発」（研究代表者：岩崎順子）の研究に取り組んでいる。

研究成果は、母性衛生学会誌に1編投稿した。また、第25回日本母性看護学会学術集会と第43回日本看護科学学会学術集会で、各1編の発表を行った。

<老人看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 日本老年看護学会 CNSCN 交流会

2023 年 11 月 11 日(土)13:00~16:30、一般社団法人日本老年看護学会 専門看護師・認定看護師活動推進委員会主催の「高齢者への共同意思決定支援 (part2)」をテーマに Web 開催され、老人看護学領域が Web 中継を担当した。

2) 看護相談室 (ケア検討会)

老人看護領域ケア検討会を 6 月と 11 月に開催した。大学院生、修了生、地域の看護職の方などが WEB 上で集まり、高齢者の事例を通して看護支援について検討した。

第 1 回目は、「改めて考えよう看・看連携」をテーマに、高齢者の排泄ケアの課題について話し合われた。具体的には、オムツ外しへの対応が必要な高齢者事例・退院後も尿道留置カテーテルでの持続的導尿が必要となったひとり暮らし高齢者事例についてディスカッションを深めた。ケアの工夫や共有方法、身体的・精神的・環境的な要因を広く検討し、看看連携のみならず、福祉、保健、社会関係など幅広く連携し気づきを共有するしくみづくりが大切であることが共有された。

第 2 回目は、終末期のがん高齢者が希望する「一時的にでも自宅に帰りたい」という思いと、自宅退院 (自宅での看取り) は受け入れできないという家族に対して、どのような看護支援や地域との連携が大切かということが話し合われた。終末期における一時自宅退院支援において、誰にどの時点で支援が必要だったのか、医療者間でも支援の準備について認識の差があること、制度における支援の限界を把握すること、病院内から自宅療養に向けた連携の在り方など、どのような看護支援や地域との連携が大切かについてディスカッションを深めた。

3) リカレント教育

今年度は、修了生から最近・この 1 年の活動状況、チャレンジを始めてみていることや課題などについて、個々に話題提供をいただいた。

修了生からは、CNS としての視点で日々の活動に携わる中、認知症ケアの推進に関する専従看護師として、多職種で活動に取り組んだり、院内教育や高齢患者を対象とした院内デイを開催したり、新たに立ち上がった倫理コンサルテーションチームでの活動などが紹介された。スタッフ教育においては、認知症や高齢者の身体的特徴などに関する看護師の知識と実践を分かりやすく解説することなどのニーズは高く、個人、組織への地道な活動を継続していくことの必要性を再認識することができた。

2. 研究活動

「急性期病院に入院中の認知症高齢者に対する効果的ケア・パッケージの開発」(2019~2023 年、基盤研究 C、研究代表者、竹崎久美子)に取り組んだ。今年度は、昨年実施した看護師を対象としたインタビューの分析結果をもとに洗練化したケア・パッケージ (案) を用いて、実装に向けて修了生から意見をいただき内容を検討している。

3. 教育活動

今年度は、COVID-19 の 5 類感染症移行により、講義科目において前期後期ともに対面授業を基本とした。老人看護援助論では、ゲストスピーカー 2 名による講義を開催した。

4. 評価

COVID-19の5類移行後においても、オンラインによる交流会やハイブリッド型授業など方法を工夫しながら柔軟に活動することができた。また、今年度も老年看護学会委員会の活動など、領域として社会および学術貢献活動を関連機関や関係する方々と連携しながら遂行することができた。

5. 次年度の課題

次年度も引き続き、社会活動および学術活動を行っていき地域の看護職の方の参加が増えるように活動を継続する。研究活動については、ケアパッケージ案の実装に向けて内容を具現化し進める。

<精神看護学領域>

1.社会貢献活動

1) 看護相談室（ケア検討会）

本年度も、高知県在職の精神看護専門看護師有志の会である「高知精神看護専門看護師の会」と協働し、専門看護師の実践能力の質の向上を目的としたケア検討会を4回実施した。

(1) 第1回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和5年6月22日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：15名(本学大学院修了生2名、精神看護専門看護師9名、教員4名)

内 容：「精神科領域における人生最終段階の意思決定支援」をテーマに実施した。高齢化や身体合併症の増加に伴い、人生の最終段階を精神科で迎える方もいる。終末期医療において、意思決定をどう支援するのが問われている。ディスカッションのなかでは、CNSとしてチーム内や他職種間の調整を図りながら、関わる人たちの集約を行う役割や、倫理的葛藤、コミュニケーションの難しさなどについて意見交換を行った。精神科医療においても、身体的医療や終末期ケアが無関係ではなくなっている状況について再認識する機会となった。

(2) 第2回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和5年9月21日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：13名(本学大学院生1名、本学大学院修了生2名、精神看護専門看護師6名、教員4名)

内 容：「若年層の自殺企図者への介入と看護師への支援」をテーマに、CNSの役割について検討した。身体科に救急搬送されてくる自殺企図者は若年層が増加傾向にあり、自殺手段へのアクセスのしやすさ、自殺企図をする若者の逃げ場が少ない現状などが共有された。ディスカッションでは、自殺企図者本人への介入だけでなく、支援者への介入についても検討され、患者－支援者－場（地域の支援センターなど）のそれぞれをつなぐ橋渡しとしての役割がCNSに求められていることが共有された。また、スタッフが安心して患者に働きかけ続けることができるよう支援することもCNSの重要な役割の一つであることを改めて振り返る機会となった。

(3) 第3回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和5年12月21日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：12名(精神看護専門看護師9名、他大学教員1名、教員2名)

内 容：「治療方針をめぐる倫理的葛藤への倫理調整」をテーマに、事例を通して意見交換を行った。患者の意向を尊重できていないと感じる看護師の倫理的葛藤に対して、CNSとしてどのような介入ができるのかディスカッションを行った。現場の看護師がアドボケイターとして医師に働きかけることができるように、看護師の誠実や自律尊重の原則に沿ったかわりへの支援など、倫理的課題の解決に向けた介入について意見交換がなされた。治療方針に関する調整や看護師との関係性の構築、力量の見極めなど、各自の倫理調整機能について振り返る機会となった。

(4) 第4回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和6年3月21日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：13名(精神看護専門看護師9名、小児看護専門看護師1名、教員3名)

内容：「役割開拓と実践力を高めていく方法」をテーマに、意見交換を行った。フリーポジションではなく、所属部署をもつ CNS ならではの組織へのアプローチに関してディスカッションを行った。また、所属部署内での活動から、組織横断的な活動へと、活動の場を拡大するための取り組みについても検討し、それぞれのミッションやビジョンをもって役割開拓を行い、実践力を高めるための具体的な取り組みを共有した。

2) 精神看護領域に携わる卒業生・修了生の交流会

日本精神保健看護学会学術集会の開催に合わせ交流会を実施してきたが、令和4年度に続き、令和5年度も COVID-19 の感染予防のため中止した。次年度以降の開催については COVID-19 の感染状況を踏まえつつ、卒業生・修了生との交流を深める機会を設けたいと考える。

3) 精神科病院におけるボランティア活動

高知県内の精神科病院が行う催し物に、学生がボランティアとして参加していたが、COVID-19 の影響で病院側からのボランティア募集がなく、活動は実施していない。次年度もボランティア参加の可否については検討していき、学生が主体的に精神障害をもつ人との交流が持てるよう環境を整えていく。

2. 研究

1) 教員の研究活動

精神看護学領域では、それぞれの教員が研究助成を受け、研究に取り組んでいる。「認知症の人と家族の伴奏を支援する家族看護援助モデルの開発」(科学研究費助成金 研究代表者：田井雅子 2021-2024 年度)、「精神科未治療・治療中断者の受療行動を促す地域協働型交渉スキル習得プログラムの開発」(科学研究費助成金 研究代表者：藤代知美 2022-2025 年度)「せん妄を誘発する環境要因と予防のための病棟環境整備ガイドラインに関する基礎的研究」(科学研究費助成金 研究代表者：中井有里 2022-2023 年度)、「双極性障害をもつ人と家族へのメンタルヘルスリテラシー獲得・向上のための看護方略」(科学研究費助成金 研究代表者：池内香 2022-2023 年度)に取り組んでいる。

研究成果として、高知女子大学看護学会誌に原著論文 1 編の論文投稿を行った。学会発表では、第 43 日本看護科学学会学術集会にて 1 編、第 33 回日本精神保健看護学会学術集会にて 1 編の発表を行った。

2) 大学院生・学部卒業生の学会発表支援

高知女子大学看護学会誌 48 巻 2 号にて学部卒業生の看護研究の投稿支援を行った。博士後期課程修了生の 2024EAFONS の学会発表支援を行った。

3. 評価と次年度の課題

他施設との連携においては、各教員が教育研究活動を通して関係構築をしている。今後も他施設や地域のニーズに関する情報収集を行い、教育研究活動をすすめていく。看護相談室においては、今年度も Web を用いた遠隔開催となった。全 4 回の開催となり、県内外から多くの専門看護師、修了生が参加した。2 月末には看護相談室の開催方法や取り上げるテーマなどについてアンケート調査を実施しており、アンケート結果を踏まえて次年度の看護相談室の運営について検討していく。また、今後も卒業生や修了生の学会発表、論文投稿等の支援を行っていく。

<家族看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

今年度は、臨床で出会うご家族へのケアについて地域の皆様と一緒に学び合うケア検討会として、地域の看護職や卒業生、修了生を対象にオンラインで開催した。

日時：令和6年2月16日（金）18:30-20:30

参加者：卒業生1名、修了生7名、大学院在学学生1名、地域の看護職3名、教員4名

事例検討：非代償性アルコール性肝硬変・肝不全の患者の家族の在宅移行支援

事例提供者：修了生

2) リカレント教育

大学院修了生への継続的なサポートの一環として、リカレント教育を実施した。年度当初に年間の開催計画を提示し、修了生から提供された事例についての事例検討や教員によるテーマに関する講義とディスカッションを毎月第3金曜日にWebミーティングツールを活用し実施した。

事例検討会では、修了生から「家族ケアの浸透における臨床での課題」や「長期入院、入退院を繰り返す子供に付き添い、同じ病棟で過ごす母親同士の相互作用」、「エンドオブライフケア期にあるがん患者とその家族のケア」、「小児科病棟において対応困難だった家族の事例」等様々な状況や健康問題を抱える家族の事例や、家族支援の実際の状況を提供していただき、検討を行った。

事例提供者の語りから始まり、参加者からの質問を通して家族の体験への理解を深め、事例家族への看護支援の方略を検討した。

【第1回】

日時：令和5年5月19日(金)18:30~20:30

参加者：修了生3名、大学院在学学生1名、教員4名

テーマ：ポストコロナの家族看護実践

講師：瓜生浩子

【第2回】

日時：令和5年6月16日(金)18:30~20:30

参加者：修了生4名、大学院在学学生1名、教員4名

事例検討：家族ケアの浸透における臨床での課題

事例提供者：修了生

【第3回】

日時：令和5年7月14日(金)18:30~20:40

参加者：修了生6名、大学院在学学生1名、教員4名

事例検討：小児科病棟における母親同士の相互作用の理解とアプローチ法

事例提供者：修了生

【第4回】

日時：令和5年8月18日(金)18:30~20:40

参加者：修了生5名、大学院在学学生1名、教員4名

事例検討：エンドオブライフ期にあるがん患者と家族の事例

事例提供者：修了生

【第5回】

日 時：令和5年10月20日(金)18:30～20:30
参加者：修了生2名、大学院在学生1名、教員3名
テーマ：臨床における家族看護実践課題共有

【第6回】

日 時：令和5年11月17日(金)18:30～20:30
参加者：修了生4名、大学院在学生1名、教員3名
テーマ：家族看護実践における記録
講 師：瓜生浩子

【第7回】

日 時：令和5年12月15日(金)18:30～20:30
参加者：修了生2名、大学院在学生1名、教員3名
事例検討：小児科病棟において対応困難だった家族
事例提供者：修了生

【第8回】

日 時：令和6年1月19日(金)18:30～20:45
参加者：修了生3名、大学院在学生1名、教員4名
テーマ：家族看護実践を豊かにするカンファレンス
講 師：長戸和子

2. 研究活動

1) 教員の研究活動

家族看護学領域の教員は、それぞれ研究代表者として、また、共同研究者として科学研究費助成金を受けて研究活動に取り組んでいる。研究代表者として助成を受けている研究課題は、「慢性心不全患者・家族のアドバンス・ケア・プランニング支援ガイドラインの開発」(研究代表者：長戸和子、2020～2024年度)、「患者・家族と看護者間のコンフリクトの発生・悪化を予防する教育プログラムの開発」(研究代表者：瓜生浩子、2020～2023年度)、「学童期にある発達障害児の家族の家族ストレスを促進するケアプログラムの開発」(研究代表者：源田美香、2020～2024年度)、である。

研究成果として、高知女子大学看護学会誌に原著論文2編の論文投稿を行った。学会発表は、日本家族看護学会第30回学術集会2題、第43回日本看護科学学会学術集会1題の発表を行った。

3. 活動の評価

今年度は、昨年度まで中止していた地域の専門職者を対象としたケア検討会を開催することができた。オンラインではあったが、司会者からの投げかけにより、全員がディスカッションに積極的に参加しながら意見交換を行うことができた。卒業生や修了生だけでなく、地域の看護職者にもこのような機会へのニーズがあることがわかった。

修了生対象のリカレント教育は、8回開催した。今年度は、昨年度と同様に年度当初に年間計画を提示していたため、それぞれの予定や関心に合わせて参加することができたと考える。家族支援専門看護師の資格を有する修了生の参加は、事例の提供を通して自己の実践を振りかえったり、他施設の家族支援専門看護師と情報交換する機会となり、相互研鑽や情報交換の機会となっていた。また、家族支援専門看護師の資格取得を目指す修了生にとっては、CNSとしての活動の方向性を考える機会となっていた。そして、在学生にとっては、家族看護実践の実際やその中での課題を知り、ロールモデルを得る機会となった。

研究活動に関しては、それぞれ、研究課題に個々で取り組んだが、互いの研究内容について共有し意見交換する機会を持つことができなかった。

4. 次年度の課題

リカレント教育・ケア検討会は次年度も継続する。今年度は、県外からの参加者が多かったため、今後も引き続き Web ミーティングツールを活用していく。

研究活動に関しては、修了生の学会発表、論文投稿の支援に取り組むとともに、教員の研究力の向上を目指して、研究に関するミーティングの実施や論文投稿の促進、修了生との共同研究などに取り組んでいく。

<在宅看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 修了生交流会

修了生同士の交流を深める目的で交流会を開催した。

日時:令和6年1月26日(金)18:30~20:30

参加者:在宅看護学領域修了生5名 教員3名 計8名

県内の病院、訪問看護ステーション、教育機関など様々な場で活躍している修了生の参加があった。在宅看護に関する県内の動向を共有し、それぞれの得意分野や現在の取り組みの情報を交換し、困りごとの相談など行った。在宅看護の発展に向けた自己研鑽となり、今後の活動に対する意欲向上にもつながった。

2) ケア検討会

看護学部看護相談室事業として、在宅看護学領域ケア検討会を3回実施した。いずれもWebにて行い、県内外からの参加があった。また、看護職以外（ソーシャルワーカー）の参加もあり、同じテーマに沿って、職種を超えて意見交換を行うことができた。

①第1回

日時:令和5年6月22日(木) 18:30~20:30

参加者:19名

訪問看護師11名(うち在宅看護専門看護師2名)、

病院看護師2名、本学大学院生2名・教員4名

テーマ:がん性疼痛を抱える療養者を地域でどう支えるか

～病院の当たり前は、次の療養先でも当たり前?～

内容:療養環境によりできるケアに違いがある場合の退院支援について検討を行った。

次施設での療養に向かうために、まずは院内で、多職種で連携することで、看護師が行うべきことが明確になると分かった。

また、病院の看護師、地域の看護師それぞれが、お互いに連携を希望しながらも躊躇していた。早期から多職種、チームで関わるためにためらわずに連携していくことを話し合った。

②第2回

日時:令和5年10月19日(木) 18:30~20:30

参加者:22名

訪問看護師5名(うち在宅看護専門看護師2名)、病院看護師11名、

本学大学院生2名、教員4名

テーマ:重症心不全(ASV使用)の在宅療養者と家族の終末期における倫理的課題

内容:重症心不全でマスク式の人工呼吸器を使用しながら終末期を過ごす在宅療養者の倫理的課題について、ジョンセンの症例検討シートを用いて検討を行った。

本人の意向や家族の状況について、視点を広げて検討でき、対象理解が深まった。その上で、家族との信頼関係形成の方法、専門職と本人・家族とが同じ目標に向かっていくための工夫などを、実際の経験なども交えながら話し合った。

③第3回

日時:令和6年2月22日(木) 18:30~20:30

参加者:15名

訪問看護師 7 名、病院看護師 5 名（うち在宅看護専門看護師 1 名）

その他 1 名（在宅看護専門看護師）、教員 2 名

テーマ：がん終末期療養者の生活の場を整える支援を考える

（家族関係が希薄で自宅療養ができず施設入所も困難なケース）

内容：がん終末期で、病状は安定しているが ADL が低下している療養者の療養先の検討と、それに伴う看護を話し合った。本人、家族の持つ強みに気づくことで、それを活かした療養場所の検討を行うことができた。

また、病院でも地域でも、療養者を支えるチームの一員として、医療者としての知識や判断、技術をチームに提供することが求められていると再認識した。

3) 健康長寿センター事業の展開

以下の健康長寿センター事業に領域教員が中心となって事業展開を行なった。なお、詳細の事業報告は、第 1 部「10.健康長寿センターにおける看護学部活動」にて報告している。

3)高知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動

(1)中山間地域等訪問看護師育成講座

(2)高知県介護職員喀痰吸引等研修

2. 研究活動

1) 研究発表

(1) 論文発表

日本看護科学学会誌に 1 件、福岡大学医学部紀要に 1 件、高知女子大学看護学会誌に 1 件、nursing reports に 1 件、Challenges に 1 件、BMC Cancer に 1 件の論文発表を行った。

(2) 学会発表

日本エンドオブライフケア学会第 6 回学術集会で 1 件、日本精神保健看護学会第 33 回学術集会・総会で 1 件、日本災害看護学会第 25 回年次大会で 1 件、第 82 回公衆衛生学会総会で 2 件、第 43 回日本看護科学学会学術集会で 3 件、第 29 回日本災害医学会学術集会で 1 件、第 28 回日本在宅ケア学会学術集会で 4 件、第 49 回高知女子大学ワークショップで 2 件、日本家族看護第 30 回学術集会交流集会で 1 件の発表を行った。

2) 活動中の研究

科学研究費助成事業(以下、科研)では、研究代表者として 4 件、研究分担者として 7 件に参画している。学内の戦略的研究推進プロジェクトとして 2 件の研究を行っている。

また、金沢医科大学奨励研究 1 件、高知新聞・高知放送生命の基金より助成を受け 1 件の研究を行っている。その他、外部の大学と連携して 2 件、外部の病院と連携して 1 件の研究を行っている。

3. 評価

修了生交流会は、対面で開催したことで、修了生同士の自由な交流も生まれ、今後の看護実践において連携の取りやすさに繋がったと考える。

ケア検討会は WEB で 3 回開催することができた。本来 COVID - 19 対策であったが、移動の負担が少ないことから県外や、高知県でも遠方の訪問看護ステーションからの参加もあり、多くの方と意見交換し、ケアの視点を広げることができた。一方で、共有した情報の整理は各参加者に任されている。情報整理の方法や検討の流れを図等で示すことで、課題解決に向けての思考の整理ができやすくなることを考え、対面も含め、ケア検討会の運営方法を見直すと良いと考える。

研究活動では、多くの研究発表を行うことができた。一方で遅れがちな研究もあるため、定期的な進捗状況の確認や、研究活動促進に向けた取り組みが必要である。

4. 次年度の課題

・ケア検討会、修了生交流会などの目的を明確化し、看護専門職のニーズに沿った企画、運営となるような方法を検討する。

<地域看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 高知県保健師人材育成

高知県保健師人材育成プログラムは、高知県健康政策部保健政策課と協働で取り組んでいる。詳細は、健康長寿センターにおける看護学部の活動、高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動を参照。

(1) 新任期保健師育成に係わる OJT 担当者会

プリセプター能力育成研修を2回実施した。初回は、新任期保健師、プリセプター、管理者を対象に、高知県新任期保健師支援プログラム Ver.3.1 の概要についての説明と、OJT による目標管理、組織管理に関する講義を行った。また、プリセプターと管理者を対象に役割理解の講義を行った。2回目は、市町村のプリセプター、管理者、高知県福祉保健所の地域支援課担当者と共に、本年度の人材育成について、評価を共有し、今後の課題等について意見交換を行った。

担当 小澤若菜・川本美香・高橋真紀子

①令和5年5月12日(金) 13:30~16:30 参加者:70名

講義「『新任期保健師支援プログラム』行動目標とは何か」川本美香
「管理者・プリセプターの役割」小澤若菜

②令和6年3月5日(火) 14:00~16:30 参加者:33名

ガイドラインを活用した新任期保健師人材育成の取り組みの評価、保健師育成の評価等についてのグループワーク・意見交換のサポートおよび助言

(2) 福祉保健所管内の保健師人材育成フォローアップ研修

福祉保健所が開催する管内新任期保健師・中堅期保健師の人材育成に関する研修では、集合研修の課題提出に向けたフォローアップとして個別課題の取り組み状況について確認を行った。また、プリセプターや管理者が支援する能力を高める講義やグループ討議での助言を行った。

中央東福祉保健所	11月10日(金) 13:30~16:30 参加者:11名 3・4年目保健師 内容:講義・グループワーク・意見交換:川本美香
須崎福祉保健所	9月11日(月) 13:30~16:30 参加者:22名 1~4年目保健師・プリセプター 内容:講義・意見交換:高橋真紀子
幡多福祉保健所	管内新任保健師研修会 8月17日(木) 9:30~12:00 参加者:16名 講義「各種事業計画に活かせる情報の分析」 他、演習:小澤若菜 管内プリセプター保健師等研修会 8月21日(月) 13:30~16:30 参加者:16名 講義「新任期御検視の行動目標の立案とフォローアップ」 他、グループワーク:小澤若菜

(3) 中堅期保健師研修会

今年度より、新任期保健師人材育成研修後の集合研修として、中堅期前期(経験年数概ね5~10年程度)を対象とした研修会を企画・実施した。本研修は、中堅期に求められる能力の向上を図ることを目的に、日頃の保健活動について感じている課題、疑問に思っていること、改善を検討し、地区活動の視点から振り返ることを目指している。今年度は、初回のため、少人数の定員とし、8名が参加した。途中、辞退者などもおり、最終7名の参加となった。

担当 小澤若菜・川本美香・高橋真紀子

- ① 1回目 令和5年9月1日（金）13：30～16：30 参加者8名（遠隔個別支援含む）
講義・演習
講義「中堅期（前期）保健師能力育成研修について」
「地区活動の展開」「地区診断について」小澤若菜
「プリシード・プロシードモデルと事例展開、健康課題の明文化」川本美香
- ② 2回目 令和5年12月22日（金）10：00～16：00 参加者7名（遠隔個別支援含む）
講義・演習
講義「地区活動計画の立案・実施について」小澤若菜
「地区活動の評価について」川本美香
- ③ 3回目 令和6年3月8日（金）13：30～16：30 参加者7名（遠隔個別支援含む）
講義・演習
講義「プレゼンテーション資料の作成について」

(4) 高知県保健師人材育成評価検討会

令和5年度の保健師人材育成関係事業計画と行政保健師確保対策、その他情報共有および意見交換を、高知県、高知市及び各種団体、高知県内の教育機関と共に、下記の日程で行った。

令和5年7月6日（木） 14：00～16：30

令和6年3月14日（木） 14：00～16：30

担当 小澤若菜・川本美香・高橋真紀子

2) 高知県保健師交流大会

高知県保健師交流大会の実行委員を担う。実行委員は高知県内大学3校、市町村衛生職員協議会、高知県看護協会、全国保健師長会高知県支部、高知市、高知県の各団体から選出された21名で構成された。

実行委員：川本美香、高橋真紀子

日時：令和6年1月20日（土）13：30～16：15

高知市春野文化ホールピアステージ 小ホール

参加人数：96名

2. 研究活動

各教員が戦略研究費及び科研費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

3. 評価

高知県保健師人材育成について、本年度は高知県から要望のあった中堅期保健師の集合研修に向けた企画を行った。その際、中堅期保健師の現状と課題の整理や、研修の先駆的な取り組みや、大学と協働しながらの活動等を踏まえ、高知県保健政策課と共に研修プログラムの作成を行った。その際、研修成果を実践活動や人材育成につなげること、活動報告や研究活動に発展させていくことを意識して研修をおこなった。また、研修時間に演習を取り入れ、参加者への個別支援が行えるように取り組んだ。参加者による研修成果について今後検討し、次年度の人材育成評価検討会で報告する予定である。

4. 次年度の課題

地域貢献活動について、人材育成ガイドラインの新任期保健師の目標管理の到達状況及び目標の見直し等の評価を行い、今後方針が決定する、保健師活動指針と連動しながらガイドラインの改定を行う予定である。また、研究活動については、各教員が、継続して取り組んでいく。

<看護管理学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会（看護相談室）

【第1回ケア検討会】テーマ「ジェネラリスト？スペシャリスト？人材育成のベストバランスを探る」

日時：令和5年6月9日（金）18:00～20:30 場所：ハイブリッド開催（A219&ZOOM）

参加者：28名（病院看護職17名、一般企業管理者1名、本学大学院生8名、教員2名）

内容：令和5年度1回目のケア検討会は、人材育成をメインテーマとして事例検討を行った。

日本看護協会は、ジェネラリストを「経験と継続教育によって習得した暗黙知に基づき、その場に応じた知識・技術・能力が発揮できる者」と定義している。一方、スペシャリストは、特定の分野に卓越した知識と技術を有した看護職と考えられている。

事例提供者の部署である手術室というスペシャリストナースの育成を重視するとスタッフ間での経験にばらつきが生じ緊急時に対応できるスタッフが限られてしまうなどの課題について議論があった。医療の高度化専門家に伴い、看護職にも高い専門性が求められる中でジェネラリストとスペシャリストのバランスをどのようにとりながら人材育成していくことが大切なのか…という悩ましい状況が今回のケア検討会では議論された。

それぞれの現場での率直な困り事や具体例を通して変革を推進する戦略や共通の悩み等、多様な現場で看護管理実践を展開しているからこそその熱いディスカッションが交わされた。

最後に大学院生からは、事例を紐解くヒントとして「手術看護における経験年数別の看護実践に関する実態調査」「中堅の中間看護管理者がとらえる人材育成に関する問題」の論文紹介があり、文献を踏まえての更に深い意見交換が行われた。参加者のアンケート結果からは、人材育成という永遠のテーマともいえる事例について意見交換することによって、日頃は管理者として話せない悩みの共有や新たな気づき、発見に繋がり、それはあらためて質の高い看護を提供できる組織を目指している管理者としての役割を再確認する機会につながっていることが確認できた。

【第2回ケア検討会】テーマ「臨床実習における学生指導のあり方」

日時：令和5年10月13日（金）18:30～20:30 場所：オンライン会議（ZOOM）

参加者：23名（外部参加者13名、本学大学院生8名、教員2名）

内容：事例提供者からは、教員として実習指導を行う中での困難について情報提供があり、参加者からは、多くの質問がみられ、事例の状況が浮き彫りになっていった。そこから、実習指導者と教員間で学生に対する評価にずれが生じた理由や学習者に対する効果的な教育について意見交換が行われた。いくら指導しても伝わらない、行動変容が起きない相手に対する教育は、臨床現場で現任教育を行う参加者にとっても共通の課題である。看護の基本は対象理解というように、学生にも学生なりの考えがあり、行動には意図がある。参加者の中には、指導する時は、相手との対話を大切にしているという意見や、ルールを守れていないとか、何か問題となる行動をしていた時には、その都度伝えるようにし、落ち着いたときに改めて振り返るようにしているという意見が出された。これらの意見を通して、重要なことは、学生の思いに寄り添いつつ、学生との相互作用の中で共に解決策を考えることであると感じた。

はじめは、当時の実習指導が良くなかったのではないかという思いを抱いていた事例提供者も、参加者からの承認や共感を通して、自身の良かった面も認識することができて

いた。このようなプロセスがリフレクションの機会となり、参加者からのフィードバックから“気づき”につながるのだと感じた。最終的には、「気持ちが悪くなりました、みなさんの意見から視野が広がったので、今後の自身の成長に繋げていきたいです。」との発言がみられ、笑顔で終えることができた。

【修了生と在校生との交流会】

日時：令和6年2月12日（月）13:30～16:00 場所：オンライン会議（ZOOM）

参加者：9名 テーマ「私と研究」

今年度の交流会は、梶谷氏（東京大学）の「哲学対話」（考えるとはどういうことか、幻冬舎、2018）を参考に「研究と自分」というテーマで自由に意見交換を行った。梶谷氏の著書では、以下の8つのルールを基本としている。①何を言ってもいい。②人の言うことに対して否定的な態度をとらない。③発言せず、ただ聞いているだけでもいい。④お互いに問いかけるだけでもいい。⑤知識ではなく、自分の経験にそくして話す。⑥話がまとまらなくてもいい。⑦意見が変わってもいい。⑧分からなくなってもいい。

参加者は、教員や在学生在が多かったためある程度お互いを知っているつもりであったが、普段なかなか聞けない研究への思い（動機、面白さ）や研究に取り組むことによる参加者の変化などについて知ることができた。また、参加者がそれぞれ自身の研究への思いや向き合い方を語ったり、他の参加者へ問いかけることを通して、自身と研究との向き合い方を見つめなおす機会となったようである。

最後は、それぞれが言いたいことを話せたことを確認し、交流会を終えた（哲学的対話は、最後にきれいにまとめようとはしない。それぞれがもやもやしたものを持ち帰ったり、それまでと違って視野が広がったような体験をして終える）。普段の研究活動では、論理性・一貫性のある議論や文章を書くことが求められるが、時には『『考える』ことを楽しむ時間もいいな』と思える交流会であった。

（詳細は HP 参照：<https://www.u-kochi.ac.jp/site/kango/category-r05-kanri.html>）

2) 高知医療センターとの包括的連携事業

本年度は、看護管理学領域からは、継続教育支援としてマネジメントリフレクション（2回）を実施した。QCサークル活動コンサルテーションは次年度の課題となった。

3) 健康長寿センター事業への参加

入退院支援事業の研修事業「管理者研修」「看護管理者研修」「入退院支援コーディネーター能力修得研修」「入退院支援コーディネーターフォローアップ研修」「多職種協働研修」の研修の企画運営に参画し、講師を務めた。詳細は、令和5年度健康長寿センター報告書にて報告している。

2. 研究活動について

看護管理学領域では、それぞれの教員が科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

3. 抄読会

看護管理学領域専攻の博士前期、後期課程の学生と看護管理学領域の教員が中心となって、週に1回実施している。本年度は、4月第1週より遠隔会議システムを活用して、精力的に実施し、夏季、冬季休業期間を除いて、2月末まで毎週継続した。プレゼンターは領域の博士前期課程の院生が中心になり、博士後期課程の学生も加わり、研究のレビューとクリティーク、研究手法の妥当

性、統計手法の再確認、実践への活用についての質疑を通して学びを深めた。本年の対象論文は、31本、延べ参加者数は、216名であった。

4. 評価

社会貢献活動の中で特に重視しているケア検討会と医療センターでの包括連携事業や健康長寿センターでの入退院支援事業等での活動が学生の研究活動へもつなげることができた。

抄読会やケア検討会の運営についても、前年度以上に博士前期課程の学生中心の主体的な取り組みとして継続して実施できた。

5. 次年度の課題

次年度以降、研究コースの学生が減少していく中で、領域内のみの活動に留まらず、大学全体の事業を活用していく。具体的には、健康長寿研究センター事業を中心に修了生の多い高知医療センターや高幡地区での活動を展開していくことを目指す。

<共創看護学領域>

1. 本年度の活動総括

共創看護学領域は開設4年目をむかえ、博士前期課程4名が修了し、現在は博士前期課程1名、博士後期課程5名が在学し学んでいる。本年度は、カリキュラムの運営と共に、学習内容の見直し・洗練化、学生の学修環境の整備を中心に行っていた。

博士前期課程修了生4名のうち、2名が修了後、高知県立大学大学院看護学研究科博士後期課程に進学し、さらに研究を発展させている。また、もうひとり、学際的な視点の強化をめざし、他大学の博士後期課程に進学し、情報学を専攻し研究活動を継続している。ひとは、臨床においてEvidenceを活用していくことや臨床の視点から研究を発信することを目指し、臨床に戻り活躍している。

現在、博士前期課程に在学している学生は、実験的な比較研究への挑戦を考えている。また、博士後期課程の5名は、ひとりが浮腫をテーマに生理学的な研究を展開している。3名は、さまざまなテーマで質的記述的研究を進め、1名は現在研究計画書の提出に向け準備をしている。今後は、修了生と在学生の交流なども企画し、ますますバラエティに富んだ研究方法を駆使できる領域集団が形成され、看護学の殻を打ち破るような研究を行い、広く社会貢献ができるようつとめていきたい。

1) 研究活動

(1) 博士前期課程・博士後期課程

[博士前期課程] 1名

現在修士論文のデータ収集を実施中

前期課程修了の4名は、公表のための英語原稿を校正中

[博士後期課程] 学生4名

うち1名現在研究計画書提出にむけ準備中

(2) 教員の研究活動

テーマ：障害文化と健常文化を超えて共創する支援のパターンランゲージ

科研基盤研究(C)2021年－2024年

研究代表者：畦地博子

本研究の目的は、障害者の多様性を認め、障害文化と健常文化を越えて共創する支援のあり方を探究することであり、多様性・文化の差異に配慮した優れた障害者支援(good practice)の実践知に内在しているパターンを明らかにし、説明力あるランゲージを提案することである。小児看護、精神看護、養護、老年看護などさまざまな看護領域の研究者と、文化人類学を専門とする研究者が学際的に協働して実施している。本年度は、研究倫理審査申請を行い、承認を得て、データ収集を開始している。

テーマ：がん化学療法による手足症候群および爪囲爪炎の早期検出と新規外用剤による予防的介入

科研基盤研究(C) 2018年－2021年

研究代表者：池田光徳

がん化学療法薬であるマルチキナーゼ抑制薬の投与により高頻度に発症する手足症候群／爪囲爪炎病変の発症機序を、皮膚生理学的検査方法を用いて明らかにし、本症の最早期病変が何であるかを検討した。手足症候群／爪囲爪炎の発症を抑制するためには、どの時期にどのような看護介入を行うのが適切かを検討した。手足症候群／爪囲爪炎をモデルとして、看護師が皮

膚をアセスメントする際に簡便かつ有用な手段を見出すことにより、EBNに基づいた看護技術を展開できるのではないかと考えた。

**テーマ：ポータブルデバイスおよびAIアプリを用いたポストコロナにおける非対面型遠隔看護
科研基盤研究(C) 2021年－2025年**

研究代表者：池田光徳

本年度は、感情認識AI解析による「腹痛」の感情値を中心に検討を進めた。詳細は今後公的に発表する予定である。ウェアラブルデバイスを用いた呼吸運動のデータが収集できないか現在検討中である。

2. 本年度の評価と次年度の課題

来年度博士後期課程は2名の学生が入学予定であるが、博士前期課程の入学者がなく、来年度は研究コースで学びたいという博士前期課程の学生の獲得が課題である。また、令和5年度は特筆すべき社会貢献がなく、今後は領域としての社会貢献についても検討していきたい。

<災害・国際看護学領域>

1) 令和5年度の活動

今年度在籍生はDNGL3名、博士後期課程1名、博士前期課程2年次3名、1年次1名、合計8名であった。これに対して、教授1名、特任教授2名の体制で教育研究活動を指導し、2名が博士前期課程を修了した。このうち実践看護師コースの学生は、在籍中に災害看護副専攻プログラムの所定の単位も取得し、副専攻（災害看護）第1号の認定を受けた。

(1) 社会貢献

① 能登半島地震対応

令和6年1月1日に発災した能登半島地震に際しては、直後から各自で情報収集および学内関係者の支援活動参加状況の把握を随時おこなっている。発災初期には、在籍学生から現地活動に参加したい旨の申し出もあったが、未経験の上、受け入れ先の確保、活動計画もない状態であったため、現地活動に参加するために必要な準備について改めて指導を行った。（結局、この学生は参加を見合わせた。）また、職場でDMATに登録する学生については、職場から2次隊までの出動可否の打診を受けたが、学位論文提出や、学位審査の時期と重なったため、面談の上、参加を見送る決断をした。

本学と災害時連携協定民間支援団体が超急性期から現地に入り活動を行っており、この団体と早期から連絡を取り、今後、中長期的支援の協力可能性についての協議を行っている。

② 国際人道支援

国際人道支援活動の教育・研究機会が確保できるように、教員が民間団体との連携を継続している。前年度から継続してミャンマー避難民の支援プログラム形成に尽力した結果、在外日本大使館によるNGO連携無償資金協力の新規事業の採択にこぎつけた。

(2) 研究活動

① 緊急人道支援学会への登録

今年度新たに緊急人道支援学会が発足したが、学生の学際研究や研究成果発表機会となることを期待して、賛助会員として登録した。初年度は学術大会（2024年2月・東京大学駒場キャンパス）に5名までの招待枠をいただき、教員1名が参加して他分野の研究者と交流を行った。

② 日本国際保健医療学会第42回西日本地方会の共催

学生にとっては、国際学会の参加、発表機会となるように、大学共催のDNGLコンソーシアム活動の一環として実施した。本学修了生が海外の任地から遠隔で口演を行った他、DNGL在籍生が学会運営に参加した。

2) 評価

(1)今年度在籍者8名中、年度途中で休学を開始した者、復学した者を含めると、半数が一部～全期間、研究に従事しなかった。出産や育児、経済的負担が主な理由であるが、災害、国際ともに未経験の状態での入学し、研究テーマに災害、国際の要素を落とし込むことに苦心する学生が、例年いることから、研究活動への適性に迷いが生じている可能性があると考えられる。

(2)防災訓練や自治体の防災活動等への学生の参加が著しく低下している。これは、参加・活動費用の補助がないこと、フルタイム学生が少なく企画・準備ができないことなどが理由と考えられる。

(3)教授のみの構成により、領域の実務を補助する管理運営のキャパシティが低下している。次年度は共同教育課程運営事務局担当校となることから、運営能力の強化が課題となる。

3) 次年度活動方針

未経験の学生の基礎的能力を向上するために、修了生等の協力を得て演習、実習など、実際に活動する機会を増やしていきたい。また、進学希望者の面接を十分行い、適性を見極めたうえで受験をするように勧めたい。さらに、少子化や全国的な類似講座の増設に対応するためには、実際に社会貢献できる人材育成を目指したい。